

# 東京方言における文末の強調型上昇調の機能について

郡 史 郎

## 1. 現代東京方言の文末音調

文の末尾音節にあらわれ、イントネーションのひとつの型として認定できる音の高さの動きを文末音調と呼ぶことにする。現代東京方言<sup>1)</sup>の文末音調として何種類を認めるべきかについては諸説がある。郡史郎(2003)では、この問題に正面から取り組んだ論考として吉沢典夫(1960)、宮地裕(1963)、上村幸雄(1989)をあげた。上昇系の音調については川上肇(1963)の論考もある。郡は上記稿において諸説を整理した上で、終助詞類の付かない文末<sup>2)</sup>における高さの動きに対象を限定し、その変化方向を基準とし表現機能も考慮<sup>3)</sup>した独自の分類を示した。論者間の相違をまとめると下の表ようになる<sup>4)</sup>。

吉沢(1960)	宮地(1963)	上村(1989)	川上(1963) <sup>a)</sup>	郡(2003)
平調	(意図表現イントネーションの) 下降調 <sup>b)</sup>	基本音調		平調 <sup>c)</sup>
昇調1	(意図表現イントネーションの) 上昇調	のぼり音調	普通の上昇調 (↗)	疑問型上昇調
			反問の上昇調 (↘)	
			つりあげ調	
昇調2	([文末以外も含む卓立イントネーションの] 高調)	つよめ音調	強めの上昇調	強調型上昇調
			浮き上がり調 <sup>d)</sup>	
降調		くだり音調		顕著な下降調 <sup>e)</sup>
			昇降調(川上1956)	上昇下降調
@型(間投性終助詞にあらわれる)	(卓立表現イントネーション)			(終助詞類の音調は別扱いする)
(昇調1の変種)		くだりのぼり音調		(顕著な下降調+疑問型上昇調)
		ひくめ音調		(アクセントの弱化)

a) 上昇系の音調についてのみの論考。

b) 「上昇調」と対立させる意味での(私見ではミスリーディングな)名称であり、実質は非上昇調のこと。

c) 独自の顕著な動きは持たないもの。音声的にまったく平坦である必要はない。平叙文末は平調であることが多いが、その際の末尾音節には緩やかな下降がある。その下降の原因には少なくともふたつがある。ひとつは非文末ではなく文末であることによるもので(郡2008, 2011)、平叙文末尾のアクセント単位では非文末の場合に比べて単位全体にかかる緩やかな下降傾向が存在する。ただしこのアクセント単位全体の下降傾向は平叙文末特有のものではなく、疑問文でも文末アクセント単位が有核・頭高型の場合は非文末より大きな下降傾向がある。もうひとつの原因はアクセントで、平叙文末尾のアクセント単位が有核(頭高型・中高型)の場合はそれ以外の場合より末尾文節の下降度が大きいことがふつうである。この音調は終助詞類なしの文末では特別な伝達機能は持たないと考える。

d) 川上自身は「浮き上がり調」を吉沢の「昇調1」に対応するものとしているが、説明を読むと音形はそれと異なる。

e) 吉沢、上村ではアクセント核の後であるためにすでに低いところからさらに下降するような動きがあるとしているように読めるが、郡はそうした動きは認定せず、アクセントのために高くなっているところからの下降のみを指す。

## 2. 上昇系諸音調の中での強調型上昇調の位置づけ

上の表で上昇系の音調について見ると、吉沢、宮地、上村、郡は2種類のを一応区別している。これに対し川上は多くの種類を区別しているが、この点については後述する。

吉沢の「昇調 1」（郡の「疑問型上昇調」に概ね相当）は、「『本がある』『机がある』という文を、話し手が、相手が本なり机なりの存在を認めているかどうかをたずねようとして発するとき」の音調形式だと説明されている。吉沢の「昇調 2」（郡の「強調型上昇調」に対応）は、「話し手が自分の述べようとするところを強調して、文末部をとくに卓立させることがある」「いわゆるプロミネンスが文末部の最終音節だけに加えられた発話の音調をさす」という説明とともに、「コレハ シャシンハキ」「アナタハ ホントニ シリマセンハネ」（原文ではハは末尾字の上）の例文が示されている。

ところが宮地は、「昇調 1」と「昇調 2」の区別は「昇調 2（ハ）が、プロミネンス（強勢）をとまなうということ以外、音調の点では、あまり顕著なものではない」「実際の多くのばあいには、音調の点、では区別がむずかしく、プロミネンスそのものは、音調の区別のきめ手ではないから、本書では、昇調に2種の区別を立てない」と言う。

一方、上村は「つよめ音調」の説明において「ぼくはかえ「る！（つたえる文）、ほんとはどうなんです「か！（たずねる文）、きみはかえ「れ！（命令、禁止の文）、あな「た！（よびかけの文）、につぼ「ん！（提示の文）」などの例文を提示している。吉沢の「昇調 2」に相当すると思われるが、上村はこれを「音声のつよさを主要な音声的手段とする」と言う。しかし「音調」という名がつけられている以上、音の高さの点でも一定の特徴があるという判断かと思われる。

郡の観察では、吉沢の「昇調 1」（郡の「疑問型上昇調」、以下この名称を使用）は末尾母音が長く発音され、長く伸ばすほど高くなるような上昇形状である。状況により上昇の始点や上昇量は異なる。頭高型アクセントの「飲んだ」をふつうの問いかけとして東京方言話者（女性）が発音した例を、平調による言い切りの発音と対比させて図 1 に示す。図の左パネルが高さの動き、右パネルが強さの動きを示す。横軸が時間（単位：秒）、縦軸が高さ（単位：50Hz を基準とする半音値）および強さ（単位：dB）である。

これに対し、「昇調 2」（郡の「強調型上昇調」、以下この名称を使用）は母音を伸ばすこともあるが、いったん上昇した後は音を伸ばしてもそのままほぼ同じ高さを保つ点に特徴がある。「飲んだ」を強い訴えかけの強調型上昇調（3 節の機能(1)）で同じ話者が発音した例を、平調による言い切りの発音と対比させて図 2 に示す。文末のアクセント型が同じであれば疑問型上昇調よりも強調型上昇調の方が上昇開始点が通常早く、上昇自体は強調型上昇調の方が小さいことが多い。「飲め「る」のようにアクセント核の直後に強調型上昇調を加える場合は上昇開始が遅くなる（図 3）。「やめられる」のような無核アクセントの場合は末尾モーラがその直前から一段高くなる（図 4）。最終モーラを長く言う際には上昇位置が後ろに移動することがあるが、この点は疑問型上昇調も同じである。ふたつの上昇調を区別することは宮地は多くの場合困難だと言うが、郡はむしろ聴覚的に判定できる場合が多いと思う。

強調型上昇調の上昇の形状としては単語アクセントに伴う上昇と同じものと考えられる。たとえば、「眼鏡」（「メ「ガネ」）を強調型上昇調で言う場合の最後のネと、「芽が根になる」（「メ「ガ「ネ「ニ…」）のネでは、上昇量に差があるとしても上昇形状に差はないようである。

さらに、強調型上昇調の上昇形態は、文章の読み上げ時などによくあらわれるような文節末モーラを際立たせる言い方や、フォーカスの実現形のひとつとしての文節末モーラまたはその直前モーラの際立たせ—大石初太郎（1959）が言う「あと高型」のプロミネンス—とも同じものであろう。ただ、この音調形が文末で用いられる場合は、4 節以下で述べるように、文末における単なる音の際立たせでは説明できない独特の対人機能を持つ。したがって、これをひとつのイントネーションの型と認定するのが妥当だと考える。

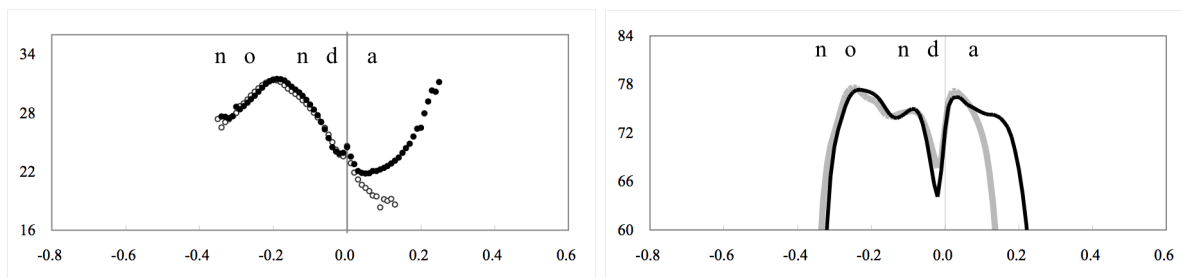


図1「飲んだ」の平調 (○) と疑問型上昇調 (●) : 左パネルが高さ, 右パネルが強さの動き

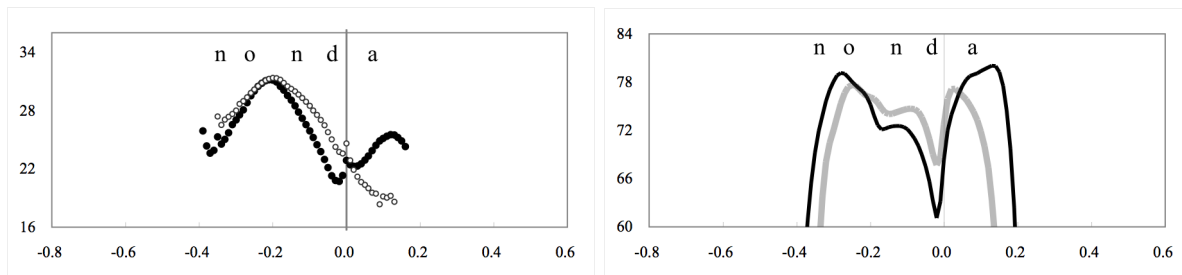


図2「飲んだ」の平調 (○) と強調型上昇調 (●) : 左パネルが高さ, 右パネルが強さの動き

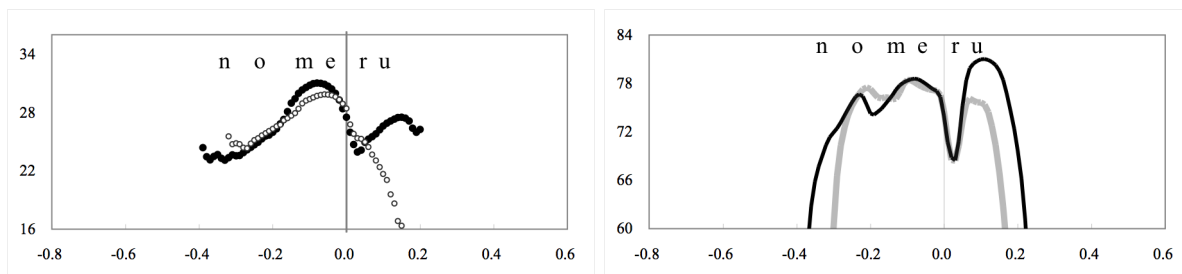


図3「飲める」の平調 (○) と強調型上昇調 (●) : 左パネルが高さ, 右パネルが強さの動き

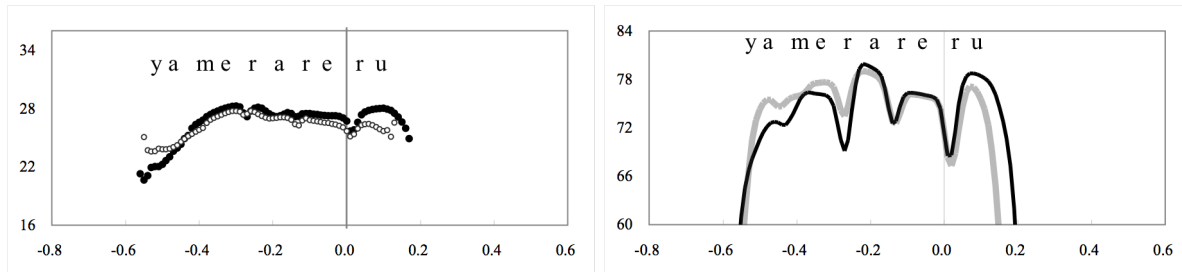


図4「やめられる」の平調 (○) と強調型上昇調 (●) : 左パネルが高さ, 右パネルが強さの動き

さて、上昇に多くの種類を区別する川上であるが、まず「普通の上昇調」と「反問の上昇調」の上昇形状については、しいて相違を求めるといふただし書きの上で、前者は↗、後者は↖という違いをあげている。しかし郡は実際の変化方向は同じと見てこれを疑問型上昇調にまとめた。川上の「つりあげ調」は「女のアナウンサーなどがよく用いる職業的イントネーションの一つ」「『です』『ます』に終わる文で e や a の終わりごろから急に上昇しつつ s に移る」「高さとともに強さも増す」という説明があるが、郡はこれを文末文節全体にかかる疑問型上昇調の音形と見る。

また、川上の「強めの上昇調」と「浮き上がり調」は、最後の1モーラの音調的卓立か2モーラ目から続く音調的卓立という違いであり上昇形状そのものの差ではないと郡は考え、まとめて強調型上昇調とした。川上は「強めの上昇調」について強さに関わるといふ、シッ「テイマ」『ス等の例をあげて「イントネーションというよりはむしろ強調の一つの型と見たい」と言う。しかし、同じ意図でも格別の音

の強めを伴わない言い方も可能であり、音の強めは訴えかけの強さに応じて加わる随意的なものとは考えられる。また機能的にも強調専用の型とは見ない<sup>5)</sup>。

強調型上昇調は終助詞類が付かない文末での使用頻度は高くないが、重要な対人機能を持っている。郡は観察や東京方言話者へのインタビュー調査の結果にもとづき、その機能について先行研究とは異なるとらえ方が妥当ではないかと考えるにいたった。本稿ではその現時点でのまとめを報告する。

この上昇は形態としてはアクセントに伴う上昇と同じものと考えるが、本稿ではこれがアクセントでないことを明確にするために記号  $\uparrow$  を用い、アクセントに伴う高低変化<sup>6)</sup> を記号  $\uparrow$  (上昇) と  $\downarrow$  (下降) で示す。疑問型上昇調は記号  $\nearrow$  で表す。

### 3. 強調型上昇調の機能 (1) : 自分の気持ちの訴えかけと配慮・対処の要求

強調型上昇調に対応する音調の機能として吉沢 (1960) は「話し手が自分の述べようとするところを強調」と言う。上村 (1989) は「はなし手からきき手への言明のおしつけ」「つたえる文のばあいは有無をいわさぬ同意の要求、たずねる文のばあいは詰問、はたらきかける文のばあいはきき手へのはなし手の意志の強制的なおしつけ、よびかけの文、提示の文などのばあいには相手へのつよい注意の喚起、とがめだて、たたみかけ」とする。川上 (1963) は「その文の述べるところを強く相手に押しつけようとする」と言う。いずれも聞き手に対して強く訴えかける点に機能を見ており、その意味ではフォーカスの音声的実現としてのいわゆる「プロミネンス」「卓立」と似ている。

しかし、文末文節へのフォーカスでは説明できない働きがここにはある。それは「自分の気持ちへの配慮・対処の要求」と呼べるのではないかと現在のところ考えている。たとえば、「降ると思った」で「思った」のモだけを際立たせて文末のタは際立たせない言い方と、モもタも際立たせる言い方(タに強調型上昇調)を比べてみる。どちらも降ることは事前に想像できた場合の言い方だが、それは「思った」にフォーカスがあるためと解釈できる。なぜなら、そこにフォーカスを置くことによって「思った」ということを強調し、降るという事態は予想していたと言いたい状況での発話になるからである。しかし、強調型上昇調を付けた方の言い方は、話し手の予想に対して正当な対応が聞き手側からなされなかったことに不満を持っており、そのことを聞き手が認めてほしいという気持ち加わる。ここで不満感という表現を用いたが、他の例を見るとそれは必須のものではない。

終助詞類が付かない場合の例をいくつか示す。なお、個々の用例については自分では使わないものがあるという東京方言話者がいる。図 5 と 6 は、図 4 までと同じ話者による  $\uparrow$ 「カ $\uparrow$ ッテマ $\uparrow$ ス (わかってます) と  $\downarrow$ 「フルト オ $\downarrow$ モ $\downarrow$ ッ $\downarrow$ タ (降ると思った) のシミュレーション発話、図 7 は自然談話例で若年層男性による モー「ヨ $\downarrow$ ン $\downarrow$ ア $\downarrow$ デ (もう [いいから] 読んで)、図 8 は同じく若年層女性の「タイショクナ $\downarrow$ ンダ $\downarrow$ ッ $\downarrow$ テ ([3月で] 退職なんだって) の高さの動きである。

例 (アクセントが弱化する場合をアクセント単位直前に上付きの  $p$  を書くことで示す) :

$\uparrow$ 「カ $\uparrow$ ッ $\uparrow$ タ,  $\uparrow$ 「カ $\uparrow$ ッ $\uparrow$ テ $\uparrow$ ル,  $\uparrow$ 「カ $\uparrow$ ッ $\uparrow$ テマ $\uparrow$ ス ([うんざりして] わかった!, 等)

イ $\uparrow$ ーマ $\uparrow$ シ $\uparrow$ タ ([言い争う際に, 自分または他者が確かに] 言いました!)

「マ $\uparrow$ ッ $\uparrow$ テ ([拒否されることを想定しない依頼] 待って!)

ガ $\uparrow$ ンバ $\uparrow$ ッ $\uparrow$ テ ([離れた相手への呼びかけ] がんばって!)

「フルト オ $\downarrow$ モ $\downarrow$ ッ $\downarrow$ タ (降ると [自分は] 思った : 降ることは想像できたのに傘を持ってこなかったことに対して非難がましい気持ちを込めて)

「ヤ<sup>↑</sup>ダ、ヤ<sup>↑</sup>ダ<sup>↑</sup>ー (いやだ!)

「ヨ<sup>↑</sup>カッ<sup>↑</sup>タ ([安心して] よかった!)

オ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>セ、オ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>セシ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>タ (お待たせ!, お待たせしました!)

「ケ<sup>↑</sup>ー<sup>↑</sup>キ カッ<sup>↑</sup>テ<sup>↑</sup>ー 「ケ<sup>↑</sup>ー<sup>↑</sup>キ (ケーキ買って、ケーキ!)

オ<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>イ、オ<sup>↑</sup>シ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>イ ([これで] おしまい!: 2モーラ1音節なら全体を高めることあり)

ダ<sup>↑</sup>メ<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup>ス「ヨ 「オ<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup>サ<sup>↑</sup>ン ([説得場面で] だめですよ、奥さん!: 同上)

「ド<sup>↑</sup>ー<sup>↑</sup>ゾ ([物を渡す際などに] どうぞ!)

モ<sup>↑</sup>ノ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ゴ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>「オ<sup>↑</sup>カ<sup>↑</sup>ネ カカ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>テ<sup>↑</sup>ル<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup>ダ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>テ (ものすごいお金かかっているんだって!)

上にあげた例は機能の点でいくつかのグループ分けできる可能性はあるが、ここでは全体に共通する要素は何かという観点から整理すると以下になるだろう: (1) 行為について自分がそれを期待どおり行っていることをわかってほしい気持ち、あるいはそれを行いたい・行ってほしい気持ちを、(2) 自分の判断や感覚について判断の正当性や感覚自体を、(3) 物についてそれが欲しい気持ち、それに伴う行為を行いたい・行ってほしい気持ちを、(4) 伝聞情報について驚きなどの感覚を聞き手に訴えかけ、それを聞き手が認識して配慮あるいは対処することを求める。つまり、「ぜひわかってほしい」「何とかしてほしい」という思いを込めた訴えかけである。「ものすごいお金かかっているんだって!」の例も驚く気持ちを訴えかけ、聞き手の反応・対応を求めている。同様の気持ちを込めた呼びかけ表現でも使われることがある。

「シー<sup>↑</sup>ラ<sup>↑</sup>ナイ (知らない!), 「ヤー<sup>↑</sup>メ<sup>↑</sup>タ (やめた!) のような責任放棄的な感動詞的表現があるが、その最後が上昇するのも対処要求 (後は誰か適当にやってくれ) として説明できるかもしれない。

文末が2モーラ1音節なら音節全体を高めることがある。不満を込めて怒ったように強く訴えかける場面が少なくないのは確かで、その場合は音の明らかな強めを伴う。加えて、ゆっくりとした発音になることがある。しかし、「よかった!」や軽く依頼する際の「待って!」、伝聞の「…って」などのように、不満感がなく、訴えかけもあまり強くない場合は意図的な音の強めは必要ないように思われる。

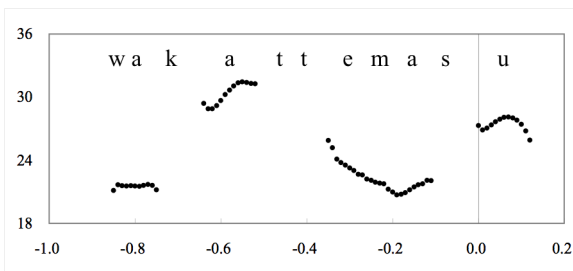


図5 「わかってます」

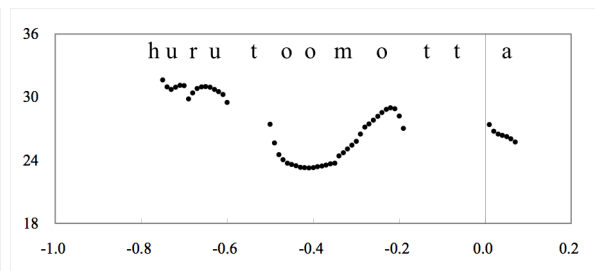


図6 「降ると思った」

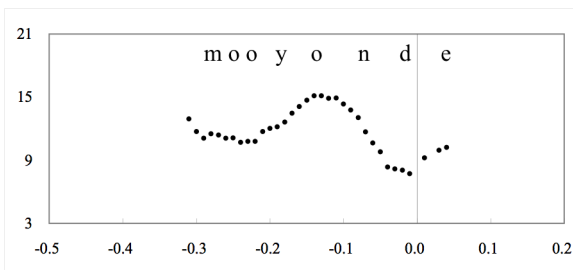


図7 「もう読んで」

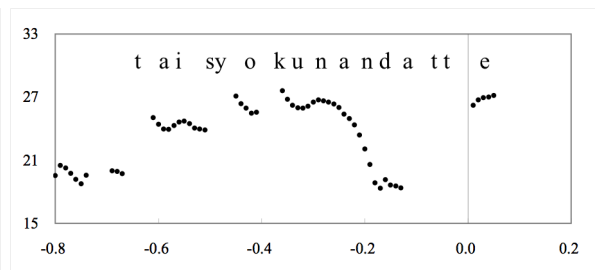


図8 「退職なんだって」

#### 4. 強調型上昇調の機能 (2) : 打ち明け話における納得・事後承諾の希望

前節で述べた「ぜひわかってほしい」「何とかしてほしい」という思いを込めた訴えかけが強調型上昇調の典型的な用法だろうが、それとはかなり異なる用法も存在すると思う。先行研究で触れられていないこと、そして東京方言話者でも自分で言うという話者と、自分では言いそうにないという話者がいるところを見ると、使用環境が非常に限定されているのかもしれない。以下に示すのは、主にテレビ番組における東京方言話者と思われる話し手の使用例に手を加えたものである。図 9 に示す「ヒ「ト」リデア「パ」ート「カ」リタ「ン」ダ（ひとりでアパート借りたんだ）」と、図 10 の「コンナニ「ク」チ「ー」サクナッチャツタ（こんなに小さくなっちゃった）」は、手元の資料の都合上、テレビアニメ（『ドラえもん』ののび太の台詞）から取ったもの。

- 例： 「ソ「ー」ダト「オ」モ「ッ」タ「ン」ダ（[自分は] そうだと思ったんだ）  
 ソ「ン」ナ「キ」ガシタ「ン」ダ（[自分は] そんな気がしたんだ）  
 ツ「キ」ア「ッ」テル「ヒ」ト「ガ」イ「ル」「ン」ダ（[実は自分には] つきあってる人がいるんだ）  
 ア「シ」タ「テ」ストガ「ア」ル「ン」ダ（あしたテストがあるんだ）  
 ベ「ン」ゴ「シ」オ「メ」ザ「ス」ン「ダ」（[実は自分は] 弁護士をめざすんだ）  
 コ「ッ」チ「ニ」ス「レ」バ「ヨ」ウ「カ」ツタ（こっちにすればよかった）  
 チョ「コ」レ「ー」ト「モ」ラ「ッ」チャツタ（[自分は] チョコレートもらっちゃった）

いわゆる「のだ文」に多いこと、そして多くは話し手自身や関係者についての情報提示であり、聞き手は話し手と親しいという特徴がある。音の意図的な強めはやはり必須ではないように思われる。

これらの例からは配慮や対処の要求を伴う訴えかけは感じにくい。かと言って単なる情報提示ではないようである。あえて言っていなかったことを言う場合や、言い出しにくいことを言う場合を含めて、いわゆる打ち明け話が多く、聞き手が予想していなかったと思われる新情報を報告している。報告する内容は既定事実であるが、そのことをできれば聞き手には理解し、納得してほしい場面で使われているように思われる。独り言・内言にあらわれるとすれば、既定事実であることを感慨とともに認識した場合であろうか。やはり単なる音の際だたせでは説明できない働きであるが、ここではこれを「納得・事後承諾の希望」と表現しておく。

この節で述べた機能(2)と前節の機能(1)は、話し手の気持ちを聞き手が認識するよう求めるという点で共通しているが、認識してほしい内容と必要度が異なる。機能(1)の場合は、認識してほしいのは話し手の意志、判断、感覚であり、それを聞き手に認めてもらわなければ話し手の気持ちは収まらない。一方、機能(2)の場合は、認識してほしいのは伝達情報が事実として存在していることであり、聞き手の気持ち次第で何かが変わるものではなく、聞き手が納得するしないは話し手にとって問題ではない。

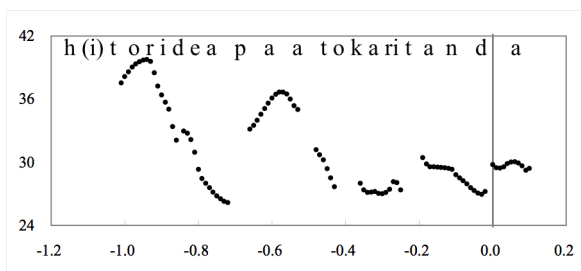


図 9 「ひとりでアパート借りたんだ」

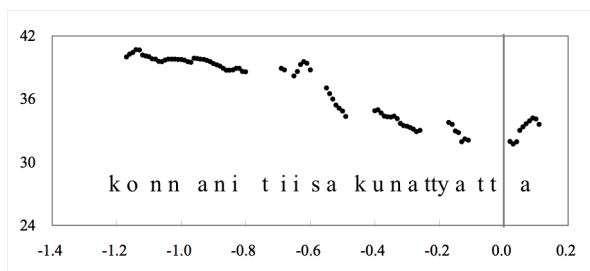


図 10 「こんなに小さくなっちゃった」

### 5. 強調型上昇調の機能 (3) : 主に2モーラ1音節の文末で用いられる弱い応答要求

川上 (1963)の「浮き上がり調」は「文の最後から二番目の拍において既にほとんど上昇が完了し、あとはほぼ平らのまま文が終る。軽く浮き上がってしまったという感じ。」という説明があるので、音形としては強調型上昇調と考えられる。用例にあがっているのは終助詞がある場合以外は文末が2モーラ1音節の場合で、文末音節にあるアクセント核による下降があっても、それをなくして上昇させるものである。

強調型上昇調のこの用法には、これまで述べたものとは異なる機能が含まれている。川上は「普通の上昇調」は「より重い態度」を、「浮き上がり調」は「より軽い態度」をあらわすと言うが、郡は表現機能としては弱い応答要求（これまで述べたものとは異なる機能というのがこれ）と、同意要求（3節で述べた機能(1)の一種として）に分けるのが適切かと現時点では考えている。

態度の軽重の差を説明する箇所でも例のひとつとして川上があげている「ド<sup>〴</sup>ンナ ゴチソ<sup>〴</sup>（普通の上昇調）と「ド<sup>〴</sup>ンナ ゴチソ<sup>〴</sup>（浮き上がり調 [注] 文末音調の表記は郡のものに変更）を見ると、この場合の強調型上昇調の機能は聞き手の応答の要求であり、その要求の度合いが弱いものと言えそうである。オイ<sup>〴</sup>シーという発音で聞き手がおいしいと思っていることを確認する場合もこの例になるだろう。川上の「浮き上がり調」には入らなくなってしまうが、文末が2モーラ1音節でなくても「ド<sup>〴</sup>ンナ カン<sup>〴</sup>ジ（どんな感じ?）、イ<sup>〴</sup>ツ<sup>〴</sup>「タ<sup>〴</sup>ベ<sup>〴</sup>タ（いつ食べた?）、ド<sup>〴</sup>コ<sup>〴</sup>デ<sup>〴</sup>「ベンキョ<sup>〴</sup> シマ<sup>〴</sup>シ<sup>〴</sup>タ（どこで勉強しました?）のような例はある。疑問詞疑問文ではよくある言い方かもしれない。

また、川上はマセン、マスについて、「チョ<sup>〴</sup>ツ<sup>〴</sup>ト | 「ミ<sup>〴</sup>セテクダサイマセ<sup>〴</sup>ノ<sup>〴</sup>の代わりに「チョ<sup>〴</sup>ツ<sup>〴</sup>ト | 「ミ<sup>〴</sup>セテクダサイマ<sup>〴</sup>センとする言い方が女性にあることを指摘し（文末音調の表記は郡のもの）、さらに新しい傾向としてサム<sup>〴</sup>イ、ホシ<sup>〴</sup>ー、ヤワラカ<sup>〴</sup>イなどの起伏式形容詞に終わる文や、タバ<sup>〴</sup>タ<sup>〴</sup>イ、ノミ<sup>〴</sup>タ<sup>〴</sup>イなどタ<sup>〴</sup>イに終わる文にも下がり目をなくして文末2モーラを強調型で上昇させる言い方がされる旨も述べている（アクセント核位置の表記は郡のもの。「キ<sup>〴</sup>テ<sup>〴</sup>ナイ（来てない?）におけるような否定のナ<sup>〴</sup>イの用法もここに加わるのであろう。機能としてはこれらも弱い応答要求と考えることができる。

さらに川上は、これとは別に「マッ<sup>〴</sup>テク<sup>〴</sup>「ダサ<sup>〴</sup>イに対する「マッ<sup>〴</sup>テクダ<sup>〴</sup>サイのように、クダサ<sup>〴</sup>イのアクセント核による下がり目をなくして文末2モーラ1音節を強調型で上昇させる言い方を取りあげ、「この類のことばは、下降的なイントネーションで言ったのでは、命令的、高圧的、独断的に響きやすい」ので「極力重苦しさを避けたイントネーションで言ってちょうど普通」と述べ、この言い方はクダサ<sup>〴</sup>イ、ナサ<sup>〴</sup>イ、イラッシャ<sup>〴</sup>イ、オッシャ<sup>〴</sup>イ、チョ<sup>〴</sup>ーダ<sup>〴</sup>イ、マ<sup>〴</sup>イ、ダロ<sup>〴</sup>ー、デシ<sup>〴</sup>ョ<sup>〴</sup>ー、マシ<sup>〴</sup>ョ<sup>〴</sup>ー、そしてカエロ<sup>〴</sup>ー、タベヨ<sup>〴</sup>ーなどの志向形に生じ、長音はダ<sup>〴</sup>ロ、デ<sup>〴</sup>シ<sup>〴</sup>ョのようにつまりやすいとしている（表記は郡のもの）。そしてこれは「戦後にわかに始まったというようなものではなく、かなり古くからあったことのようなものである」と言う。これらは強調型上昇調にすることで聞き手に同意を求めていると見ることができ、同意を求めることで命令的、高圧的、独断的な響きが和らげられるのではないかと思われる。するとこれは3節で述べた「自分の気持ちの訴えかけと配慮・対処の要求」の用法の一種と言えそうである。自分の判断を認めるよう訴えかける ア<sup>〴</sup>ノ<sup>〴</sup>ヒトガ ユ<sup>〴</sup>ー<sup>〴</sup>ノナラ「ソ<sup>〴</sup>ーナンダ<sup>〴</sup>ロ（あの人が言うのならそうなんだろ）となると、3節の用法そのものである。

## 謝辞

話者の方々と情報をご提供いただいたみなさんに御礼申し上げます。

## 注

- 1) ここで言う現代東京方言とは「東京旧市内に相当する地域生育の高年層、およびそこを中心とする半径 30-40km の圏内と西多摩地域で生育した中年層と若年層のうち、多摩地域、荒川左岸地区、埼玉県、茨城県、千葉県、神奈川県本来の地域的特徴として報告されてきたような要素が格別認められない話者の母語としての日本語変種」と一応規定しておく。
- 2) 郡(2003)の分類は郡(1997)の改訂版だが、それは「ひとまず対象を文末詞が付かない時の文末拍（長呼される場合を含む）に限定した上で、アクセントによる変化を捨棄した音調」の分類だとした。本稿ではその後の考察を踏まえ、「文末拍（長呼される場合を含む）」の部分は単に「文末の音節」としたい。「文末詞」は本稿では「終助詞類」と言い換えたが、これを考察対象から除外したのは、終助詞類の音調はその内部での高さの変化方向だけでなく、直前の言語形式から「順接」するか「低接」するかという要因によっても規定され、そのため終助詞類の音調は終助詞類が付かない場合に比べて種類が多くなっており、終助詞類が付く場合と付かない場合を最初からまとめて論じるのは妥当でないからである。また、音調と表現機能との対応を考える上でも、終助詞類がない場合の音調は文末の形式や意味には依存しない一定の機能を有すると思われるのに対し、終助詞類には個々の形式と恣意的に結びついた固有の音調を持つと思われる場合があり、それらを最初から含めて考えると、全体として音調と表現機能の対応関係の整理が困難になるという理由もある。終助詞類の音調についての現在の見通しとして、内部での高さの変化方向については、終助詞がない場合の文末音調と機能面での共通性がかかなり高いのではないかと考えている。
- 3) 分類自体は変化形状をもとに行った。すなわち、変化形状が同じなら、上昇開始点（文末モーラ冒頭からの上昇か、文末モーラ内部からの上昇か、あるいは次末モーラからの上昇か）や上昇量に差があっても、音調としては同じものと考えた。一方、表現機能は音調の名称に一部反映させたが、この点については本稿の注5も参照されたい。
- 4) この表は対象（終助詞類、句末を含めるかどうか）も基準も異なる分類の結果についておおまかな対応関係を示すものである。したがって、次節で述べるような吉沢(1960)の「昇調2」に対応する音調の音声の実態の認定についての違いなどがある。また、川上の論は文末音調の全体像について述べたものではないので、表で空欄であっても、その音調を認定していないとは限らない。
- 5) その意味では本稿の「強調型上昇調」という名称にも問題があることは承知している。上昇形状にのみ注目すれば「押上型上昇調」とか（その場合、疑問型上昇調は「跳上型上昇調」）、アクセントに伴う上昇と同じという意味では「アクセントの上昇調」という呼称も可能だが、いずれもそれなりの問題を含むので、本稿では拙稿（2003）の呼称を継承する。
- 6) ア「レワ」マ「チガ」イデンタ（あれは間違いでした）という文で、「間違い」のアクセント核が要求するガからイへの下降のほか、マの直前の下降とチへの上昇もアクセントによるものと現在のところ考えている。なお、コーバン（交番）の第1モーラは一般的にはコクバン（黒板）のそれほど低くないが、第1モーラから第2モーラへの明瞭な上昇がある場合が多いので、その場合はコ「ーバン」と書く。

## 引用文献

- 上村幸雄 (1989) 「日本語のイントネーション」 『ことばの科学』 3, 193-220.  
大石初太郎 (1959) 「プロミネンスについて」 『ことばの研究』 第1集, 87-101.  
川上泰 (1956) 「昇降調の三種」 『音声学会会報』 92, 7-8/25.  
川上泰 (1963) 「文末などの上昇調について」 『国語研究』 16, 25-46.  
郡史郎 (1997) 「日本語のイントネーション—型と機能」 国広哲弥他（編） 『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 三省堂, 169-202.  
郡史郎 (2003) 「イントネーション」 上野善道編 『朝倉日本語講座3 音声・音韻』 朝倉書店, 109-131.  
郡史郎 (2008) 「東京方言における平叙文末の下降増大現象」 『音声言語 VI』 (近畿音声言語研究会) 81-104.  
郡史郎 (2011) 「東京方言の平叙文末に見られる下降増大現象について（再考）」 『音声研究』 15(3), 76-77.  
宮地裕 (1963) 「イントネーション」 『話しことばの文型(2)』 国立国語研究所, 178-208.  
吉沢典男 (1960) 「イントネーション」 『話しことばの文型(1)』 国立国語研究所, 249-288.